

56.

616.56-006

原發性肝臓癌ノ病理解剖學的竝ニ統計學的研究

岡山醫科大學病理學教室 (主任田村教授)

中 村 俊 雄

[昭和 10 年 10 月 8 日受稿]

*Aus dem Pathologischen Institut der Okayama Medizinischen Fakultät
(Vorstand: Prof. Dr. Tamura).*

**Pathologisch-anatomische und statistische Untersuchungen
über den primären Leberkrebs.**

Von

Toshio Nakamura.

Eingegangen am 8. Oktober 1935.

Im unseren Institut fand sich in den letzten 10 Jahren unter 545 Sektionsfällen der primäre Leberkrebs in 16 Fällen (29,17 %). Ein solch hoher Prozentsatz ist in der bisherigen Statistik sowohl der östlichen als auch der westlichen Länder noch nicht angegeben worden. Bei 10 (62,5 %) von diesen 16 Fällen handelt es sich um Hepatom und bei 6 um Cholangiom (37,5 %). Man findet hier, also einen ungewöhnlich hohen Prozentsatz des letzteren.

Was uns vor allem in der Entwicklung interessierte, ist das Schmarotzen von *Distoma spatulatum* bei 10 von 16 Fällen, insbesondere bei 5 der 6 Cholangiomfälle.

Die Leberzirrhose findet sich beim Leberkrebs in 87 %. Bei Hepatomfällen beobachtet man den zirrhotischen Vorgang in 80 %, und zwar findet er sich dabei vorwiegend im Interstitium. Bei Cholangiomfällen trifft man ihn in 100 % an; er bildet dabei hauptsächlich eine intracinöse Leberzirrhose.

Obwohl die Metastase im allgemeinen nicht bedeutend ist, erscheinen ihre Prädisloktionsstellen in der Reihenfolge: Leberhiluslymphdrüse, Lunge, Milzkapsel, Mesenteriallymphdrüse, Thoraxwand, Diaphragma, grosses Netz, Pankreaskopf-lymphdrüse und Nebenniere. Wenn sich auch in dieser Beziehung nichts Seltsames zeigte, so unterscheiden sich diese An-

gaben doch ein wenig von den bisherigen Berichten dadurch, dass bei machen Fällen von Hepatom die Metastasenbildung im Verhältnis zu denen von Cholangiom hochgradig ist. Ascites findet sich in 81 % (in 80 % von Hepatom, in 83 % von Cholangiom), Milztumor in 43,75 % (in 40 % von Hepatom, in 50 % von Cholangiom) und Ikterus in 62,8 % (in 60 % von Hepatom, in 66,7 % von Cholangiom). Der Geschwulstsitz ist häufiger im rechten Lappen (44 %) als im linken (25 %) zu finden, ist in 31 % der Fälle mehr diffus, wobei man nicht entscheiden kann, ob er sich im rechten oder linken Lappen primär entwickelt. Bei Hepatom findet sich der Primärherd in 50 % im rechten, in 20 % im linken

Lappen und ist in 30 % diffus. Bei Cholangiom zeigen die oben genannten drei Lokalisationen alle den gleichen Prozentsatz.

Ein histologisch interessanter Fall war Nr. 10 von Hepatom mit dem Verschluss der unteren Hohlvene, so dass ein Übergangsbild zwischen Geschwulstgewebe und gesundem Leberzellstrang nachzuweisen war. Der 16 Fall stellt eine gemischte Form der beiden Arten des Leberkrebses dar. Bezüglich des letzten Falles glaubt Verf., dass sich die Geschwulst von Schaltstück der Leber aus entwickelt hat und dass das Geschwulstgewebe einerseits cholangiomatös, andererseits mehr hepatomatös ausgebildet worden war. (Autoreferat)

目 次

第1章 緒 言
第2章 研究成績
第1節 肉眼的所見
第2節 組織學的所見
第1項 實質性肝臟癌
第2項 膽管上皮性肝臟癌
第3章 總括及ビ考按
第1節 統計學的觀察
頻 度
性及ビ年齡
肝硬變トノ關係
原因の事項
轉 移
腹水及ビ脾腫
黃 疸
占據部位
第2節 組織學的觀察
第4章 結 論

第1章 緒 言

原發性肝臟癌ハ從來稀ナル如ク考ヘラレタルモ、本邦ニ於テハ三浦ノ報告以來山極、貴家ノ詳細ナル研究ニ次イデ報告例及ビ統計的觀察多數ニ發表サレ、之ガ研究ニ甚シク進捗發展ヲ來セリ。蓋シ肝臟ナル發生母地自己ガ其ノ構造官能ニ於テ興味深キモノナルト同時ニ癌腫組織トシテモ其ノ組織發生上特異ナル所見ヲ呈シ、加フルニ本邦ニ於テハ泰西ニ比シ其ノ頻度甚高キガ爲ナラム。本邦ニ於ケル統計的研究ヲ見ルニ、東大貴家110例、京大新島34例、九大山根57例、金澤醫大岡田ノ10例、慈惠醫大岡崎12例、海軍軍醫學校中村ガ13例ヲ發表シ其ノ他ノ症例等ヲ合スレバ實ニ300例ノ多キニ達ス。岡山ニ於テハ明治44年武内ガ5例ヲ發表セルガ余ハ最近10

年間ニ於テ剖検セラレタル16例ノ原發性肝
臓癌ヲ得テ之ヲ組織學的ニ檢索センニ統計上
及ビ發生要約上ニ於テ興味アル結果ヲ得タル
ヲモツテ之ヲ報告セントス。

第2章 研究成績

第1節 肉眼の所見

研究ニ供セラレタル原發性肝臓癌16例ニ於テ
腫瘍部所見竝ニ參考資料ノ大要ヲ表示スレバ次ノ
如シ。(第1表)

第 1 表

番 號	解剖 番 號	年 齡 性	肝 腫 瘍 部 所 見	部 位	肝 重 量	轉 移	脾腫	腹水	浮腫	黄疸	其 ノ 他
Nr. 1	111	55 ♂	右葉全體ニ互リテ鳩卵大、一錢 銅貨大、灰白色鞏固ナル結節アリ。 一部ハ半透明ナル粘液性ノ 部アリ、限界比較的明カナリ。 左葉ニ於テモ同様同性質ノ結節 ヲ認ム。肝實質ハ暗赤色	左右	4800	肝内淋巴腺 肺	95	250 血性	+	(-)	「肝チストマ」 酒 } 不明 WR
Nr. 2	134	51 ♂	右葉ノ中央部ニ鶯卵大ノ圓形黃 白色腫瘍アリ、又全面ニ豌豆大 ノ黃白色ノ結節散在シ表面ニ突 出シ境界銳利、硬度半流動ノ感 アリ、大小何レモ蜂巣狀ニシテ 中央部ハ軟化崩壊性ナリ	右	2100	後腹膜淋巴腺	270	1600 血性	(-)	++	膽 石 酒 } 不明 WR
Nr. 3	142	63 ♀	右葉ハ初生兒頭大、左葉手掌大、 其ノ他ノ部ニ粟粒大ノ結節多數 散在シ表面凹凸不平、帶黃灰白 色硬度鞏固ナルモ大ナルモノハ 中心部ハ軟ニシテ崩壊性、肝實 質帶黃褐色細葉像不明ナリ	左右	2350		65	500 血性	+	±	酒 } 不明 WR
Nr. 4	217	45 ♂	右葉ハ豌豆大、櫻桃大ノ結節アリ テ帶黃白色境界明カナリモ硬 度モ硬軟混在シ或ハ膿汁樣ヲ呈 ス。之等結節ノ間ニ不正形ヲ呈 シテ走レル新生組織アリ、境界 比較的明、肝組織ハ暗赤色細葉 像著明	右	1350	腸間膜淋巴腺 後腹膜、肝間、 肺門ノ各淋巴 腺	125	2100 黃色 透明	(-)	(-)	「肝チストマ」 酒 } 不明 WR
Nr. 5	226	35 ♂	左葉ハ殆ド全部腫瘍化シ中央部 ハ大部分半流動ノ頽敗物ト化ス 表面凹凸甚シ。右葉ハ左葉ニ近 ク粟粒大、豌豆大ノ結節アリ、 右葉橫隔膜ト應着セル鶯卵大ノ モノアリ、硬度比較的軟、灰白 色、一般ニ境界明カナリ。肝實 質ハ蒼白細葉像著明	左	1262	肺、縱隔實淋 巴腺、胸廓壁、 脾被膜	420	少量 血性	++	(-)	「肝チストマ」 酒 + WR (-)
Nr. 6	231	37 ♂	左葉ハ大部分腫瘍物質ニテ占居 サレ表面ニ近ク豌豆大、小豆大 ノモノアリ、周邊ハ一般ニ不規 則像ヲ呈シ灰白色鞏固ニシテ境 界不明瞭ナル所多シ。右葉ニモ 豌豆大一大豆大ノ結節散在ス、 表面左葉凹凸不平、右葉平滑、 肝實質細葉像著明	左	2125	橫隔膜	210	2600 血性	(-)	++	酒 + WR (-)
Nr. 7	266	42 ♂	表面一般ニ平滑、剖面細葉像著 明、結締織ノ増殖ナク、血竇尋 常ニシテ正常ニ近シ、鏡檢的ニ 1箇ノ小腫瘍結節ヲ檢出シ得 タリ	左	1080		40	(-)	(-)	(-)	酒 } 不明 WR

番號	解剖番號	年齡性	肝腫瘍部所見	部位	肝重量	轉移	脾腫	腹水	浮腫	黄疸	其ノ他	
Nr. 8	294	78 ♀	右葉中央部表面ニ近ク小兒頭大ノ腫瘍アリ。中央部ニハ軟化セルモノモリナリ。又左葉ニモ認メラル。大ナモノ米粒大ノ結節散在シ。灰白色一般ニ鞏固。境界明ナリ。	右	2020	肝門及ビ脾臓頭部附近ノ淋巴腺		35	(-)	(-)	(-)	「肝ヂストマ」 酒 (-) WR (-)
Nr. 9	307	56 ♂	右葉ニ小豆大ヨリ鶏卵大ノ結節多數散在シ。小ナルハ筆。大ナルハ中央部軟化シ。黄白色或ハ血色ニ富ム所アリ。何レモ正圓形ヲ呈シ。周圍トノ境界鋭利ナリ。肝組織ハ細葉像著明。稍硬度ヲ増ス。	右	3280			170	1000	(-)	卅	「肝ヂストマ」 酒 (卅) WR (卅)
Nr. 10	350	29 ♂	右葉ニハ雀卵大。鳩卵大。左右兩葉ニ互リ。蠶豆大乃至粟粒大ノ結節ヲ多數ニ認メ。灰白色。帶黄灰白色ニシテ周圍トノ境界鋭利。硬度ハ一般ニ彈力性筆。大ナルモノモ蠶豆大。米粒大ノモノヨリ集成サル。肝實質ハ溷濁。細葉像不明。血量ニ富マズ。	右	1300	腸間膜淋巴腺		840	(-)	(-)	+	下空靜脈閉鎖 酒 (-) WR 不定著明ナラズ
Nr. 11	352	58 ♂	兩葉共ニ驚卵大。鳩卵大ヨリ豌豆大ニ至ル多數ノ結節ニ富ム所アリ。大ナルモノハ蠶豆大ニナリ。表面凹凸アリ。肝組織ハ淡黄色。硬度ヲ増ス。	左右	2800	兩側副腎。脾被膜。左肺。肝門及ビ腸間膜淋巴腺		112	150	(-)	(-)	「肝ヂストマ」
Nr. 12	363	58 ♀	表面ハ一般ニ顆粒性ニシテ右葉橫隔膜面及ビ下面ニ於テ豌豆大乃至針止針大ノ灰白色鞏固ナル結節ヲ認ム。剖面ハ右葉ニテハ肝實質ハ僅ニ認メラレ。緑褐色ヲ呈シ。硬度ヲ増ス。	右	1350			170	2100	(-)	卅	「肝ヂストマ」 酒 (卅) WR (卅)
Nr. 13	390	40 ♂	表面ハ凹凸著シカラズ。左葉ニハ略全部腫瘍化シ。右葉ニハ2箇初生兒頭大ノ結節アリ。色灰白色。境界著シク鋭利ナラズ。中心部ハ灰黄色ノ濃様物ヲ容レ。右葉ノ1箇ハ鳩卵大ノ空洞形成ス。中心ヨリ放射線狀ニ索狀走行ス。	左右	3000	肺		190	950	(-)	卅	「肝ヂストマ」 酒 (-) WR (-)
Nr. 14	427	55 ♂	右葉ニ限局シテ大ナル腫瘍アリ。形狀比較的不規則。色帶黄色一般暗赤色ヲ呈シ。硬度鞏固。周圍トノ境界明。表面ハ凹凸不平。肝實質ハ細葉像著明。膽汁色ヲ呈ス。	右	1200	肝門淋巴腺大網		110	400	(-)	卅	酒 } 不明 WR }
Nr. 15	443	48 ♀	左葉ハ全部腫瘍化シ。灰白色鞏固。境界鋭利ナラズ。腫瘍周圍部ハ不規則ナル像ヲトリ。左葉ヨリ右葉ニカケテ所々ニ。特ニ膽管ノ周圍部ニ豌豆大ノ結節アリ。表面陷没セルモノアリ。肝實質ハ膽汁色。細葉像著明。	左	1065			60	600	(-)	卅	「肝ヂストマ」 酒 (卅) WR (卅)
Nr. 16	545	48 ♂	表面ハ右葉ノ大半及ビ左葉ノ大部分腫瘍組織ニテ充タサレ。多數ノ結節アリ。剖面ハ左右兩葉ニ互リテ手掌大ノ腫瘍ニヨリテ占固サレ。色黄白色鞏固ニシテ境界ハ比較の鋭利ナリ。其ノ他隨所ニ鶏卵大。大小豆大ノ結節アリ。肝實質細葉像不明。	左右	2100	肝。脾被膜。肝門淋巴腺		125	2200	(-)	+	「肝ヂストマ」 酒 (-) WR (卅)

(表中●印ヲ附セルハ實質性肝腫。他ハ膽管上皮性肝腫ナリ。猶ホ之ガ決定ノ準據ニ關シテハ後述スル所アリ。)

上記表ニ就テ肉眼の所見及ビ年齢、性等ヲ觀察スルニ 原發性肝癌 16 例中女性 4 例ニシテ 他ハ男性、實質性肝癌 10 例中女性 1 例、膽管上皮性肝癌 6 例中男女各々相半バス。年齢ハ最低 29 歳（實質性肝癌）最高ハ 78 歳（膽管上皮性肝癌）ニシテ兩型何レモ 40 代及ビ 50 代ニ多ク殊ニ 50 代ニ於テ最多シ。脾腫（重量 150 g 以上ノモノヲ取ル）ヲ見ルモノ 7 例ニシテ實質性肝癌 10 例中 4 例、膽管上皮性肝癌 6 例中 3 例ニ於テ脾腫ヲ認ム。腹水ハ實質性肝癌 10 例中 8 例ニ於テ認め内 5 例ハ血性、3 例ハ漿液性、膽管上皮性肝癌 6 例中 5 例ニ於テ腹水ヲ認め内 3 例血性 2 例ハ漿液性ナリ。浮腫ハ兩種癌共ニ各々 1 例宛上半身ニ比較的高度ナルモノヲ認メタル外著シキモノナシ。黃疸ハ 10 例ニ於テ之ヲ認メ實質性肝癌ニ 6 例、膽管上皮性肝癌ニ於テ 4 例ヲ算セリ。

肝重量（健康肝臟重量平均 1.1—1.35 kg）ニ就テ見ルニ、最上平均値以上ノモノ 9 例、平均値以内ノモノ 7 例、最低平均値以下ノモノハ之ヲ認メズ。最上平均以上ノモノハ實質性肝癌ニ 5 例、膽管上皮性肝癌ニ 4 例ナリ。

肝癌ノ肝臟ニ於ケル占據部位ヲ見ルニ、右葉 7 例、左葉 4 例、左右孰レトモ明ナラザルモノ 5 例ニシテ之ヲ内別スレバ實質性肝癌ニ於テハ右葉 5 例、左葉 2 例、左右ニ存スルモノ 3 例、膽管上皮性癌ニテ 3 部位何レモ 2 例宛ニ存ス。

腫瘍自己ノ肉眼の性状ニ就テ見ルニ表面ハ概ネ凹凸不平ニシテ色ハ一様ナラザルモ灰白調ヲ呈スルモノ多ク其ノ限界ハ概ネ銳利ニシテ腫瘍組織ハ蜂窩狀ヲ呈スル場合多ク、硬度ハ鞏固ナルモ大ナル腫瘍ニテハ壓中心性軟化ヲ來シ崩壊性トナルモノ多シ。之等肉眼の性状ニ就テハ實質性肝癌ナルカ、膽管上皮性肝癌ナルカ判然タル區別ヲ擧ゲ得ザル場合多シ。但シ (6), (13), (15) ノ膽管上皮性肝癌ニ於テハ腫瘍ノ境界比較の銳利ナラザル所ヲ

認メラレ、(13), (15) ニ於テハ周邊部ニ線狀走行ヲ認ム。猶ホ (8), (15) ニ於テ表面腫瘍部ハ僅ニ凹部ヲ來スモノアリ。(9), (11) ノ實質性肝癌ニ於テハ腫瘍内ニ出血竈ヲ著明ニ認メシム。

腫瘍ノ轉移ハ肝門淋巴腺最多ニシテ 6 例、次イデ肺ノ 5 例、腸間膜淋巴腺及ビ脾臟被膜各々 3 例、後腹膜淋巴腺 2 例、肺門及ビ縱隔竇淋巴腺、胸廓、橫隔膜、大網、脾臟頭部淋巴腺、副腎各々 1 例ナリ。實質性肝癌ニ於ケル轉移ハ肝門淋巴腺 4 例、肺腸間膜淋巴腺、脾被膜各々 3 例、後腹膜淋巴腺 2 例、肺門淋巴腺、縱隔竇淋巴腺、胸廓、大網、副腎ノ各々 1 例ニシテ膽管上皮性肝癌ニテハ肝門淋巴腺及ビ肺各々 2 例、橫隔膜、脾臟頭部淋巴腺各々 1 例宛ナリ。

第 2 節 組織學の所見

本研究ニ供シタル材料 16 例ヲ山極、貴家ノ分類ニ從ヒテ實質性肝癌ト膽管上皮性肝癌ニ大別シテ記述セントス。

第 1 項 實質性肝癌

腫瘍部所見：腫瘍ハ肥厚セル間質結締組織ニヨリテ大小種々ノ胞巢ニ區劃サレ、其ノ大サ及ビ形ハ例ニヨリテ異リ、又同一例中ニ於テモ部位ニヨリテ異ル。實質細胞ハ其ノ大サ肝細胞ヨリ大ナルヲ通常トシ、多クハ圓形、散子形ナルモ不整形、紡錘形或ハ圓柱狀ヲ交フル場合モ少カラズ。稀ニ Monocytan 様圓形細胞ヨリナルモノアリ。而シテ之等腫瘍細胞ハ一般ニ細胞膜顯著ニシテ原形質ノ性状ハ一定セザルモ概ネ「エオジン」ニ好染シ更ニ輕ク「ヘマトキシリン」ヲ取リテ淡紫色ヲ帶ビタルモノ多ク、又甚シク透明性ナルモノアリ。猶ホ原形質中「グリコーゲン」ノ存在ヲ思ハシムル顆粒、或ハ膽色素顆粒ヲ認ムルモノアリ。核ハ胞體ニ比シテ大ニシテ圓形、卵圓形ヲ主トスレド不整形紡

錘形ヲ混ズル場合アリテ、細胞體ノ略ボ中央ニ占據シ染色性ニ富ミ核仁ハ1—2ニシテ明カナリ。斯カル細胞ハ單核ナル事アリ、多キモノニ於テハ數箇ノ核ヲ入レ、胞體モ甚シク大トナリテ巨態細胞ノ狀ヲ呈スルモノアリ。核分割像モ通常多數ニ認メラル。

而シテ斯カル細胞ヨリ成ル組織ハ配列ニヨリテ略ボ2型ニ區分サレ、第1型ハ(5)、(9)、(10)、健態肝組織或ハ結節狀增生竈ノ如クニ單列乃至2—3列ノ細胞ガ迂曲セル細胞索ヲナシテ相互ニ不規則ニ吻合ヲ成スモノニシテ索狀ノ或モノハ中央ニ管狀腔ヲ形成シ所謂花冠狀像ヲ呈スルモノアリテ(2)、(5)、(7)、(9)、(10)内ニ膽汁樣物質ヲ入ルモノアリ。第2型ニ屬スルモノハ(2)、(3)、(4)、(7)、(11)、(14)、(16)ノ胞巢内ノ實質ハ十數列ノ細胞ヨリナリテ充實性ヲ示スモノナリ。コノ兩型孰レモ索狀或ハ胞巢ハ毛細血管ノ脉絡ニヨリテ區劃サレ、其ノ間ニ密接ナル關聯ヲ有スル點ニ於テハ同様ニシテ毛細血管ハ狹小ナルモノ又ハ甚シク擴大充血セルモノアリテ、甚シキハ實質細胞群ハ横斷サレタル毛細血管ヲ中心トシテ其ノ周圍ニミ蟬集セルモノアリ。或ハ又胞巢周圍ノ腫瘍細胞ハ健在ニシテ相連絡セルモ中心部ハ變性壞死ニ陥レルモノアリ。猶ホ一般ニ胞巢周圍ノ毛細血管ニ接觸スル部ニ於テ圓柱細胞或ハ時ニ紡錘形細胞ヲ見ル事アルヲモツテ恰モ血管肉腫(3)、(11)ヲ思ハスル如キモノ出現ス。腫瘍組織ヲ大小種々ノ分野ニ區劃セル腫瘍間質ハ增生セル結締織ナルモ、其ノ胞巢間組織ノ主體ハ原發結節ナルト轉移結節ナルトヲ問ハズ毛細血管ニヨリテ形成サルル事ハ前述ノ如キモ陳舊ノ度ヲ重ヌルニ隨ヒテ結締織ハ毛細血管ニ沿ヒテ深ク分野内ニ侵入シ索狀胞巢ヲ圍繞セル毛細血管ハ結締織ニヨリテ置換サレ、單純癌ノ像ヲ呈ス(4)、(5)、而シテ漸次中心壞死ノ起ルニツレテ間質結締織ハ益々侵入シテ

遂ニ「スキルス像」ヲ呈スルニ至リ(2)、(3)、(14)、(16)恰モ偽管ニ似タル癌索ヲナスモノアリ(16)且間質結締織ハ異常ニ増殖シ硝子樣變性ニ陥レルモノアリ。

實質性肝癌ハ主トシテ排壓性ノ發育ヲ營ム場合多キモ(2)、(3)、(4)、(5)、(9)、(10)、(14)、浸潤性發育ヲ營ムモノモ亦稀ニ認メラル(11)、(16)。而シテ前者ニ屬スルモノハ肝組織トノ境界ニ於テ結締織ノ增生サルル事多ク其ノ部ニ小圓形細胞ノ浸潤ヲ認ムル事屢ナリ。後者ニ於テモ結締織ノ增生ヲ認ムル事アルモ腫瘍細胞ハ直接肝組織ト接シ其ノ境界ニ於テハ腫瘍細胞間ニ壓迫萎縮或ハ變性ヲ起セル肝細胞ノ介在セルヲ認メ其ノ間腫瘍細胞ト肝細胞間一般ニ移行像ハ認メシメズ。唯(10)ニ於テノミ2箇所ノ切片ニ明カニ正常ノ細胞索ヨリ直接ニ腫瘍細胞ニ移行セルノ像ヲ認メ得タリ。即チ「エオジン」ニ強ク染色セル正常ノ肝細胞索ハ直接、空胞樣ノ「クロマチン」ニ富メル核ヲ有シ原形質ニ乏シク胞體淡明ナル細胞索ニ連續セルヲ認メタリ(詳細八木報告參照)。

尙ホ組織學的ニ稍々異型ヲ呈シタル第16例ニ關シテハ次ニ述ブルガ如キ興味アル所見ニ接セリ。即チ本例ニ於テハ腫瘍細胞自己及ビ其ノ配列狀態ニ於テ特異ニシテ甚ダ幼若ナル結節竈ニ於テハグリソン氏鞘ヲ中心トシテ腺癌樣構成ヲモツテ發育シ、細胞ハ低圓柱乃至圓形ニシテ核ハ中心性ナルアリ或ハ低位ニ存スルモノアリ。斯カル細胞ハ1層又ハ2—3重層ヲナシ、之等細胞ガ放線狀ヲナシテ中心腔ヲ有スル如ク配列スルモノアリ。又ハ單ニ充實性ノ細胞團ヲ形成スルモノアリ。而シテ結締織ハ之等細胞ニ伴ヒテ強ク發達シ比較的毛細血管ニ乏シキ狀ヲ見ル。而シテ陳舊ノ度ヲ加フルニ從ツテ結締織ハ之等細胞ヲ十數箇宛胞巢スル如ク侵入シ、甚シク陳舊ナル場所ニ於テハ3—5列ノ細胞索ガ或ハ長ク、或ハ短ク胞巢トシテ區劃サレ、

其ノ周圍ハ主トシテ結締織ニテ包埋サレ毛細血管ハ比較的貧弱ナリ。サレド癌細胞自己ハ主トシテ圓形、骰子形ニシテ間々低圓柱形ノモノヲ交ヘ核ノ大サ甚シク不整ニシテ且染色力不定ナリ。胞體中ニハ泡沫狀ニ脂肪顆粒ヲ入ルルモノ多ク、中ニハ全ク脂肪變性ニ陥レルモノアリ。又少數作黄褐色ノ色素顆粒ヲ有スルモノヲモ認ム。

猶ホ第7例ハ嘗テ河村ノ報告セルモノナルモ其ノ材料ヲ得ラザリシヲモツテ主トシテ組織學的所見ハ報告記載ニヨリタルモノナル事ヲ附言シ、第10例ニ於テハ八木ニヨリテ下空靜脈閉鎖ヲ伴ヘル「ヘパトーム」ニ就テト題シテ報告セルモノナル事ヲモ附記ス。

肝實質部所見：腫瘍細胞ニ接スル肝實質ハ壓迫萎縮ニ陥リテ胞體及ビ核モ細長トナレルモノアリ。甚シキモノハ變性ニ陥ル。殊ニ排壓性發育ヲナスモノニ於テ著シ。之ニ反シテ肝實質ノ肥大增生ヲ營ミテ結節狀ヲナセルモノアリ。膽毛細管ノ擴張シ膽汁ヲ充セルモノヲ認ムル事アリ。又中心靜脈及ビ毛細血管ノ鬱血著明ナルモノ亦少カラズ。間質結締織ハ増殖肥厚及ビ小圓形細胞ノ浸潤ヲ認メ細葉間性肝硬變ヲ呈セルモノ多ク(2), (3), (4), (10), (14), 更ニ強ク肝細胞索間ニ纖維ナル結締織ノ侵入ヲ伴フモノアリ(4), (10)又全ク細葉内性肝硬變ノミヲ呈スルモノアリ(9), (16)又血管壁周圍ニノミ結締織肥厚ヲ見ルモノ(5)或ハ肝硬變ノ全ク認メラザルモノ2例存ス(7), (11)。間質ノ増殖甚シキモノニ於テハ其ノ結締織中ニ肝細胞索ヲ認ムル事アリ、又結締織間ニ「肝ヂストマ」ノ卵ヲ介在スルモノアリ。大小膽管ニ就テハ増殖ノ見ラザルモノ(2), (3), (7), 稍々著明ナルモノ(5), (10), (11), (14), (16), 又著明ニ大膽管上皮ノ増殖及ビ細小管ノ増生及ビ擴張ヲ認ムルモノアリ(4), (9)。但シ(4), (5), (9), (11), (16)ニ於テハ「肝ヂストマ」ノ寄生ヲ認メタルモノナリ。

第2項 膽管上皮性肝癌

腫瘍部所見：通常ノ腺腫性癌或ハ腺癌ト同様ニ結締織性間質ト實質細胞トニヨリテ腫様構造ヲナセル胞巢ヲ形成シ、胞巢ハ圓形、或ハ類圓形ヲナシテ腔ヲ圍メルモノアリ、或ハ又樹枝狀ニ分岐シテ互ニ網狀ニ連絡セルモノアリ。實質細胞ノ形狀ハ圓柱狀、短圓柱狀、骰子形、不整形ナル事アリ、或ハ又紡錘狀ヲナセル事アリ。大サハ種々ナルモ正常膽管上皮細胞ニ比シテ大ナリ。形、大サハ各々例ニヨリテ異リ又同一例ニ於テモ其ノ部位ニヨリテ異レルモノアリ、或ハ形態種々ノモノヲ交ユル時アリテ巨態細胞ヲ見出ス事アリ。核ノ分割及ビ變性壞死ハ隨所ニ認メラル。而シテ之等腫瘍細胞ハ細胞膜顯著ニシテ原形質ハ顆粒ナク透明性ナリ。核ハ主ニ圓形、卵圓形ヲ呈シ核染色性ニ富ミ濃染シ細胞ノ基底ニ存ス。斯カル細胞ハ或ハ單層或ハ重層ヲナシテ存在シ甚シキハ腔内ニ充實セルモノアリ。之ヲ重層セルモノニ於テハ腔ニ近キ細胞ニ於テ扁平細胞ニ化生スル傾向ヲ見ルモノアリ。腫瘍部ニ於テハ血管ニ乏シク腫瘍組織ハ毛細血管ト密接ナル關聯ヲ認メ難ク隨ツテ實質ハ貧血性ニシテ且壞死性變化ヲ認ムル事屢ナリ。幼若竈ニ於テハ肥厚セリグリソン氏鞘ヲ中心トシテ兩側ニ或ハ片側ニ進展シ之ニ伴フ間質結締織ハ稍少キモ陳舊ナル部位ニ於テハ間質著シク増量シ實質細胞群ハ狹小ナル胞巢狀ヲナスニ至ル。コノ間質結締織ト實質細胞トノ比率ニ種々ノ階梯ノモノヲ認メラル。サレド發育甚シク迅速ニシテ間質ノ之ニ伴ハズシテ細胞ハ壓迫サレテ紡錘狀ヲナシ恰モ紡錘狀細胞肉腫ヲ見ルガ如キモノアリ。コトニ周緣部浸潤部ニ於テ斯カル狀顯著ナリ。猶ホ間質及ビ腫瘍實質部ニ於テ小圓形細胞ノ浸潤ヲ見ルモノ多シ。膽管上皮性癌ノ發育ハ主トシテ浸潤性破壊性ニシテ排壓性ノモノナシ。隨ツテ腫瘍細胞ト肝實質ノ境界ハ徐々ニシテ肉芽組織ノ形成ヲ見

ル事ナキモ、該部小圓形細胞ノ浸潤ヲ認ムル事少カラズ、サレド浸潤性發育ヲナスモノニ於テモ、其ノ發育迅速ナルタメニ周圍ノ肝實質ハ壓迫サレテ紡錘狀ヲ呈スル事アリ。

肝實質部所見：腫瘍周邊部ノ肝實質ハ壓迫萎縮ニ陥レルモノハ稀ニシテ、肝實質ハ高度ナル鬱血及ビ膽汁鬱滯アリ、之ガタメ著シキ萎縮或ハ變性壞死ニ陥リクツパー氏細胞ハ甚シク肥大シ且膽汁色素顆粒ヲトルモノ多シ、猶ホ肝實質細胞ニ於テ代償性ニ進行性變化ヲ示セルモノハ部分的ニモ殆ド認メラレズ、膽管ノ大ナルモノニ於テハ擴大シ且上皮細胞ノ増殖著明ナルモノ多クシテ、腺腫狀ヲナスモノアリ(6), (12), (15), 且細小膽管ハ増生著明ニシテ又上皮ノ増殖著シキモノアリ、之等膽管ヲ繞リテ結締織性間質ハ何レモ甚シク増量セルモ細葉間性硬變ヲ呈セルモノハ少ク唯1例アルノミ(12)。而シテ他ノ膽管上皮性癌ノ例ハ多ク小葉間間質結締織ヨリ更ニ小葉間ニ纖維ナル結締織ノ侵入著明ニシテ主トシテ膽汁性、「肝デストマ性」硬變ノ像ヲ呈ス。且間質結締織ノ膽管附近、肝實質ニハ小圓形細胞ノ浸潤著明ニ認メラル。即チ之等ノ例ニ於テ其ノ大部分ニ「肝デストマ」ノ寄生ヲ見ル事及ビ間質結締織、膽管等ノ所見ヨリシテ「肝デストマ」寄生ニヨル慢性増殖性膽管炎、膽管周圍炎ヲ呈シ且「肝デストマ」ニヨル肝硬變ヲ來セルモノナリ。

第3章 總括及ビ考按

第1節 統計的觀察

頻度：肝臟ニ於テハ其ノ血行等ノ關係及ビ位置的關係ヨリシテ轉移性癌腫ノ多數招來スル事アルハ周知ノ事實ニシテ原發性肝癌ハ洋ノ東西ヲ問ハズ比較的稀ナル事ハ前述セル所ナルガ此處ニ試ミニ諸學者ノ統計ヲ比較スルニ表記ノ如シ。

第 2 表

報 告 者	總解屍數	原發性 肝 癌	%
Goldzieher v. Bokay	6000	18	3.00
Winternitz	3700	3	0.81
Hale White	18500	25	1.3
v. Mielecki	7186	5	0.69
Fried.	1200	4	3.3
Clawson & Cabot	5100	1	0.19
v. Glahn & Lamb	1800	6	3.3
Counciller Mc Indoe	5976	5	0.83
慈 大 岡 崎	721	12	16.64
九 大 山 根	2503	57	22.77
京 大 新 島	4027	34	8.44
金 大 岡 田	1440	10	6.94
東 大 貴 家	11494	110	9.57
海 軍 中 村	828	13	15.70
岡 大 中 村	545	16	29.17

猶ホ Counciller Mc Indoe ハ米國ヲ主トセル諸統計蒐集ニ於テ解屍總數 42276 體中、原發性肝癌ハ 62 例(1.4%)ナルヲ報ジ、表記中、歐米總解屍體 49462 體中原發性肝癌ハ總計 67 ニシテ 1.15%ヲ示ス。本邦ニ於ケル總計ハ岡山ヲノゾキテ總計解屍體 21013 中、236 例ニシテ 11.23%ヲ算シ、本邦ハ歐米ニ比シテ遙ニ平均頻度ノ大ナルヲ知ル。然ルニ當岡山ニ於テハ 10 年以前ノモノハ灰燼ニ歸シタルタメ不明ナルモ、其ノ後約 10 年間ニ於ケル解屍體 545 例中原發性肝癌 16 例ヲ見タルモノニシテ 29.17%ニ達ス。又癌腫屍總數 98 例ニ對シテ約 18%ヲ示シ、肝癌(轉移性ヲ含ム) 38 例ニ對シテ 47%ニ相當スルモノナリ。而シテ原發性肝癌 16 例ヲ内別スルニ實質性肝癌 10 例(62.5%)膽管上皮性肝癌 6 例(37.5%)ニシテ上記兩腫瘍ノ比ヲ内外ノ統計ニヨリテ見ルニ Eggelノ泰西ニ於ケル蒐集例 116 例ニ於テ實質性肝癌 99 例(85.3%)膽管上皮性肝

癌 17 例(14.7%)ヲ示シ、岡田ガ本邦ニ於ケル昭和 2 年度迄ノ蒐集例 187 例、内實質性肝癌 147 (78.56%) 膽管上皮性肝癌 40 (21.44%) ニシテ、其ノ後ノ發表ヲ見ルニ貴家 110 例ノ内實質性肝癌 83 (75.45%) 膽管上皮性肝癌 27 (24.55%)、中村 13 例、内實質性肝癌 10 (77%) 膽管上皮性肝癌 3 (23%) ニシテ略ボー定値ヲ示セリ(第 3 表)。

第 3 表

報 告 者	原發性 肝癌	實質性	%	膽管 上皮性	%
Eggel (歐洲蒐集例)	116	99	85.3	17	14.7
岡 田 (本邦蒐集例)	187	147	78.56	40	21.44
貴家 (東大)	110	83	75.45	27	24.55
中村 (海軍)	13	10	77.—	3	23.—
本邦平均			77.—		23.—
中村 (岡山)	16	10	62.5	6	37.5

然ルニ當地方ニ於ケル兩種癌ノ比ハ全ク從來ノ統計ト格段ノ差アルハ注目ニ値ス。

性及ビ年齢：東西ノ統計ヲ見ルニ實質性肝癌ガ男性ニ多キハ略ボー一致セル所ナルモ、兩性ノ差ニ至リテハ本邦ニ於テ殊ニ著明ナルガ如ク、本研究ノ結果モ、男性 9 例女性 1 例ニシテ從來ノ統計ト略ボ同様ノ結果ヲ示セリ。膽管上皮性肝癌ニ於テハ泰西ノ統計蒐集セル Eggel ニヨレバ男：女 = 6：8 ニシテ女性ニ多ク、我國ニ於テハ山極 1：1、山根 3：1、岡田 7：3、貴家 2：1 ニシテ泰西ノソレト相反シテ男性ニ多シ。余ノ統計ニ於テハ 3：3 ノ同數值ヲ示セリ。

年齢の關係ニ就テ見ルニ實質性肝癌ハ西歐

ニ於テハ 50—70 歳ニ於テ最モ多ク、70 歳以上ノモノモ可成リ存シ Eggel ノ統計ニ於テモ 8 例ノ多キニ達セリ。我國ニ於テハ 30—60 代ニ於テ、コトニ 40 代ニ於テ最モ多ク 70 歳以上ノモノハ未ダ經驗サレズ。膽管上皮性肝癌ニ於テハ西歐(Eggel ニヨル)ニテハ 60 代ニ多ク我國(岡田ニヨル)ニ於テハ 40—60 ノ間ニ最モ多シ。而シテ 70 歳以上ノモノニ於テハ Eggel 1 例、我國ニ於テハ岡田及ビ尾河各々 1 例ヲ見タルノミニシテ何レモ女性ニシテ洋ノ東西ヲ問ハズ 60 歳以上ノ男性ニ於テ經驗セルモノナシ。當教室例ニ於テハ實質性肝癌及ビ膽管上皮性肝癌何レモ 40 代及ビ 50 代ニ多ク 50 代ヲ最多トナス。即チ本邦ノ平均年齢ヨリ稍々高ク西歐ニ比シテ稍々低ク、其ノ中間年齢ニ於テ最多ナルモ從來ノ本邦例ト同様 60 歳以上ノ男性ニ於テ之ヲ認メ得ズ。西歐ノ如キ實質性肝癌ニテ高齢者ヲ認メ得ザリシモ膽管上皮癌ニ於テハ 78 歳ノ最高年齢ヲ經驗セリ。サレド先述セル Eggel、岡田、尾河ノ各例ト同様女性ニシテ男性ノ高齢者ハ同様ニ經驗セザリキ。

肝硬變トノ關係：原發性肝癌ガ屢肝硬變ト同時ニ經驗セララル事ハ歐米及ビ本邦ニ於ケル統計ニヨリテモ明ガナル所ニシテ Eggel ハ實質性肝癌ニ於テ 86.4% 膽管上皮性肝癌ニテハ 62.5% ニ於テ肝硬變ヲ伴フトナシ、其ノ後 Goldzieher, Von Bokay ハ實質性肝癌ニ 100%, 膽管上皮性肝癌ニ 42.8%, Karsner, Winternitz, Fried, Von Glahn & Lamb, Councellen Mc Indoe 等ハ兩型ヲ通ジテ常ニ硬變ノ存スル事ニ一致セリ。我國ニ於テモ貴家ハ實質性肝癌ニ 83.4%, 膽管上皮性肝癌

ニ 51.8% ニ於テ肝硬變ヲ認メ岡田ノ昭和 2 年度迄ノ本邦統計蒐集ニヨレバ、實質性肝癌ニ 69.5%、膽管上皮性肝癌ニ 39.6% ニ於テ肝硬變ヲ示セリ。隨ツテ由來 Orth, 山極, Huguenin, Schmieden, 其ノ他ノ諸家ハ肝癌ト肝硬變ノ因果的關係ヲ論ジ、山極ハ本邦ニ於ケル原發性肝癌ノ頻度多キハ肝硬變多キニ由來スルモノナリト唱道スルニ至レリ。本研究ニ於ケル統計ヲ見ルニ肝硬變ハ 16 例中 2 例(7), (11)ニ於テ全ク之ヲ認メ得ズ、他ノ 14 例ニ於テハ硬變ノ種類及ビ其ノ程度ニ差アルモ何レモ之ヲ認メ得、之ヲ兩種癌ニ分別スレバ實質性肝癌 10 例中 8 例(80%)ニ於テ、膽管上皮性肝癌ニ於テハ 100% ニ於テ認メタルモノナリ。サレド之ヲ硬變ノ種類ニヨリテ分類スルニ、實質性肝癌 8 例中 5 例ニ於テ細葉間性硬變ヲ認メ 2 例ニ於テ細葉內性硬變、1 例ニ於テハ主ニ血管外膜ノ肥厚ヲ來シタルモノナリ。膽管上皮性肝癌ニ於テハ 6 例中細葉間性硬變ヲ認メタルモノハ僅ニ 1 例ニシテ他ノ 5 例ハ何レモ細葉內性硬變ヲ認メタリ。

上記成績ヲ本邦ニ於ケル先輩諸氏ノ統計ニ比スルニ實質性肝癌ニ於テハ硬變ノ伴フ百分率ニ於テモ、細葉間性硬變ノ多數ヲ占ムル點ニ於テモ略ボ近似ヲ示スモ膽管上皮性肝癌ニ於テハ著シキ相違アリ。思フニ後者ニ於ケル相違ハ次項ニ於テ述ブル如ク「肝デストマ」ノ寄生ニヨルモノナランカ。即チ膽管上皮性肝癌ニ於ケル殆ド全例及ビ實質性肝癌ニ於ケル細葉內性硬變ヲ呈スルモノハ 2 例共ニ「肝デストマ」ノ寄生ヲ認メタル事、且全ク硬變ヲ見ザル 2 例ニ於テハ「肝デストマ」ノ寄生ヲ認メ得ザリシ事等ヲ併考スルニ「肝デストマ」ノ

寄生ハ又肝硬變ノ一因タル事ヲ首肯セザルヲ得ズ。

原因事項： 前述セル性、年齢、肝硬變等ハ何レモ原因的要約ニ屬スベキハ勿論ナルモ其ノ他ニ今日迄ニ現レタル諸家ノ統計ニヨリテ本腫瘍ノ所謂原因トシテ認メ得ラレタル事項ヲ見ルニ、西歐ニ於ケル Eggel ノ統計ニヨルニ「アルコール」中毒 30, 膽石症 14, 肝臓ノ後搾溝 7, 肝臓外傷の刺戟 7, 遺傳素因 4, 微毒 3, 肋骨骨折治癒部ト肝及ビ横行結腸トノ癒着 1 例トナリ、本邦ニ於テハ貴家ニヨレバ「アルコール」17, 微毒 15, 膽石症 12, 「肝デストマ」寄生 10 等ヲ其ノ主ナル原因トセリ。猶ホ岡田ノ總括的統計ニヨレバ「アルコール」26, 「肝デストマ」16, 微毒 12, 膽石 6, 日本住血蟲 4 ヲ其ノ主ナルモノトセリ。即チ彼此何レニ於テモ「アルコール」ガ本腫瘍ノ發生ニ重大ナル役ヲ演ズルモノナル事、一致セル事實ニシテ寄生蟲コトニ「肝デストマ」ノ寄生ハ西歐ニ於テハ全ク皆無ニシテ、我國ニ於テハ桂田、鶴飼、貴家、服部、渡邊、尾河、田中ハ珍奇ナルモノトシテ發表セルモ最近主要要約トシテ見做サルハ至レリ。之ガタメ、本邦ニ於テ特ニ該癌腫ノ多數ヲ見ルハ之等寄生蟲ニヨルモノナリト西歐諸家ノ唱道スルハ亦故ナキニ非ズ。

翻ツテ本研究ニ於ケル之等諸原因ヲ探究スルニ、「アルコール」及ビ微毒有無ノ明カナル 9 例ニ於テ「アルコール」5, 微毒 4 ニシテ全例ヲ通ジテ「肝デストマ」寄生 10 例ヲ示シ其ノ他膽石症及ビ下空靜脈閉鎖各々 1 例宛ヲ見タリ。即チ本研究ニ於ケル原因的要約ト見做サルハモノノ從來ノ統計ニ現レタル要約ト著

シテ異ハ點ハ「肝ダストマ」寄生例ノ頻數ナル事ニシテコトニ膽管上皮性肝癌ニ於テハ6例中5例ニ於テ之ヲ認メ實質性肝癌ニ於テモ9例中5例ニ於テ之ヲ認メタリ。即チ本研究ニ於テモ從來ノ統計ノ示ス如ク「アルコール」、微毒等モ肝癌發生要約トシテ意義ヲ有スルハ勿論ナレド「肝ダストマ」ノ寄生ガ重要ナル役割ヲ演ゼシモノナル事ニ注意セザル可カラズ。

斯カル「肝ダストマ」寄生例ニ於テハ何レモ慢性増殖性膽管炎及ビ周圍炎ヲ呈シテ間質ノ結締織ノ増殖ヲ來スヲ認ム。之蟲體ノ機械的刺戟竝ニ其ノ新陳代謝產物ニヨル化學的刺戟ニヨルモノナルベシ。又膽汁ノ慢性鬱滯ノタメニ末梢膽管ノ擴張及ビ膽汁刺戟ニヨル上皮細胞ノ新生増殖ヲ促シテ肥厚擴張シ炎症増殖ヨリ遂ニ癌腫ヲ惹起セシモノナラム。肝細胞ニ對シテモ「肝ダストマ」ハ肝實質ノ諸種變性壞死ノ原因トナリテ肝細胞ノ補綴的再生ヲ促シテ山極、貴家、吉田ノ說ノ如キ結節狀増生ヨリスル實質性肝癌ノ誘因ヲモナシ得ベシ。上記所見ニヨリスカル寄生蟲ニヨル化學的、機械的刺戟ハ直接及ビ間接ニ、又主因的ニ又補助的要約トナリテ原發性肝癌ノ發生ヲ營爲スルモノト思考スルヲ得ベシ。

當地方ニ於ケル原發性肝癌ガ歐米ハ勿論、本邦ノ他地方ニ於ケルヨリ、其ノ頻度ニ於テ最高率ヲ示シ、殊ニ膽管上皮癌ニ於テ著シキハ特筆スベキ事實ナリ。而シテ之等「肝ダストマ」ノ寄生ガ發生原因ノ大勢ヲ支配セルハ國民衛生上大イニ注目スベキ事ナリ。

轉移： Freiches, Schüppel 等ハ嘗テ原發性肝癌ハ轉移極メテ稀有或ハ皆無ナリト唱ヘ

シハ餘リニモ極論ニ過グルモ現今ニ於テハ肝内ニ於ケル轉移ハ早期ニ且多數ニ行ハルルモ肝外ハ比較的遅ク且稀ナルモノトハ諸家ノ一致スル所ナリ。Eggel ノ表ニヨレバ164例中102例即チ62.19%ニ、我國ニ於ケル170例中98例即チ57.54%ニ於テ肝外轉移ヲ見タリト云フ。而シテ之ヲ兩種癌ニ就テ見ルニEggelハ實質性肝癌中34%、膽管上皮性癌中35%ニ、本邦ニ於テハ前者ハ54%、後者ハ71%ニ於テ轉移ヲ認メラレシガ如シ。余ノ研究例ノ統計ヲ見ルニ16例中12例ニ於テ肝外轉移ヲ見タルモノニシテ75%ニ該當ス。猶ホ兩種癌ニテ之ヲ見ルニ實質性肝癌ニ於テ77%、膽管上皮性肝癌中66%ヲ示ス。即チ一般ニ諸家ノ統計ニ比シテ高率ヲ示スモノナルモ單ニ肝門淋巴腺或ハ後腹膜淋巴腺ノミニ止マルモノ實質性肝癌ニ4例、膽管上皮性肝癌ニ1例、計5例ヲ見ル。而シテ轉移部位ハ從來ノ報告ヲ見ルニ甲状腺、副腎以外ノ内分泌腺及ビ眼球、口腔、攝護腺、子宮ニ於テハ未ダ認メラザルモ、其ノ他ノ諸臟器ニ於テハ總テ經驗セラレタリ。余ノ例ニ於テモ特ニ珍奇ナル部位ニ轉移ノ認メラレシ事ナク、實質性肝癌ニ於テ肝門淋巴腺4例、肺及ビ腸間膜淋巴腺脾被膜各々3例、後腹膜淋巴腺2例、肺門及ビ縱隔竇淋巴腺、胸廓、大網、副腎ノ各々1例ニシテ膽管上皮性肝癌ニテハ肝門淋巴腺、肺各々2例、横隔膜、脾臟頭部淋巴腺各々1例ニシテ好轉移部位ハ概ネ諸先輩ノ報告ト同ジウスルモ膽管上皮性肝癌ノ例ニ比シテ實質性肝癌ノ轉移ノ多數且高度ナルモノ多キハ從來ノ統計ニ比シテ稍々趣ヲ異ニセル所ナリ。

腹水及ビ脾腫： 原發性肝癌ニ於ケル腹水

ノ存在ハ Eggel ニヨレバ 58.5% ニ於テ認メ
ラレ實質性肝癌中 68%, 膽管上皮性肝癌中 38
%ナルガ本邦ニ於ケル總括的統計ニヨレバ肝
癌中 91% ニ於テ腹水ヲ認メラレ, 實質性肝癌
中 93.1%, 膽管上皮性肝癌中 82.5% ニ當ル。
即チ實質性肝癌ニ於テ多數ヲ占ムルハ彼此ノ
一致セル所ナルモ, 總計ニ於テ腹水ノ頻度ハ
我ハ彼ニ比シ遙ニ多ク本研究例ニ於テモ 16
例中 13 例 (81%) ニ於テ腹水ヲ認メ内別スレ
バ實質性肝癌中 80%, 膽管上皮性肝癌中 83%
ヲ示シ略ボ我國ノ平均値ニ近キモ膽管上皮性
肝癌ニ於テ稍々高率ナラハ異ニス。而シテ腹
水ノ性状ヲ見ルニ 13 例中 8 例ニ於テ血性 4
例ニ於テ黃色微濁, 1 例ニ於テ黃色透明ニシ
テ最高量 (解屍體時) 2200 cc ニシテ 1 L 以上
ヲ有スルモノ 6 例ナリキ。斯カル腹水ノ依テ
來ル理由ヲ考察スルニ門脉枝ノ腫瘍塞及ビ肝
硬變等ニヨル腹部靜脉系ノ鬱血ガ重大ナル關
係ヲ有スル事ハ何人モ容易ニ推察シ得ル所ニ
シテ或ハ又癌腫性腹膜炎及ビ全身浮腫ノ一部
分現象トシテ出現スル事モ考ヘ得ベシ。而シ
テ統計上ヨリシテ血性腹水ノ比較的多數ヲ占
ムルハ門脉系内鬱血ニ更ニ血行ノ變調ヨリス
ル濾出性出血, 又ハ腫瘍組織ノ軟化, 壊死, 崩
解ニ續ク破綻性出血ニ因スルモノナラム。

脾腫ハ昔時ハ原發性肝臓癌ニハ皆無トサ
レ, 之ガ肝硬變症トノ鑑別ニ利用サルベシト
ナセルモ, 前述腹水ノ主要誘因タル腹部靜脉
系ノ血行障礙ハ同時ニ脾腫ノ誘因トナリ得ベ
キモノナルヲ思ヘバ之ガ存在ヲ否定スルノ誤
ナル事ハ明カニシテ Eggel ハ 147 例中 47 例
(31.3%) 岡田ノ總統計ニテハ 185 例中 84 例
(45.4%) ニ於テ脾腫ガ見ラレ, 實質性肝癌中

48.9% 膽管上皮性肝癌中 32.5% ニ内別サル。
本研究ニ於テモ 16 例中 7 例 (43.75%) ニ於テ
脾腫ヲ認メ實質性肝癌中 40%, 膽管上皮性肝
癌中 50% ニ於テ出現セリ。

黄疸: 肝臓癌ニ於ケル黄疸ノ有無ハ主ト
シテグリソン氏鞘内ノ細膽管ガ廣キ範圍ニ互
リ塞セララルカ又ハ粗大膽管ノ壓迫狹窄其ノ
他機械的障礙ニ歸因スルモノノ如ク, 本研究
16 例中 10 例ニ於テ (62.8%) 黄疸ヲ認メラレ
之ヲ兩種癌ニ分別スレバ實質性肝癌中 60%
ニ, 膽管上皮性肝癌中 66.7% ヲ示セリ。即チ
之ヲ本邦平均ノ 54% 及ビ西歐平均ノ 61% ニ
比スルニ稍々高率ヲ示ス。サレド何レノ統計
ニ於テモ膽管上皮癌ニ於テ優勢ヲ示セル點ニ
於テハ同様ニシテ癌腫發生母地ガ膽管ニ密接
ナル關係ニアルガ爲メナルハ論ヲ俟タズ。サ
レド實質性肝癌ニ於テモ猶ホ多數例ニ黄疸ノ
出現セルハ外方ヨリノ膽道壓迫ハ勿論ナルモ
肝腫瘍細胞ノ膽汁分泌アルハ周知ノ所ニシテ
之ガ排出道ナク, 腫瘍構造上血管中廣ク排泄
サルニ因ル。

占據部位: 主腫瘍ノ占據部位ニ關シテハ
Eggel ハ主トシテ右葉及ビ彌漫性ニ來ルモノ
ニシテ左葉ハ極メテ稀ナリト云ヒ, 岡田ノ總
統計ニヨレバ, 右葉 96 例 (內實質性肝癌ニ 74
例, 膽管上皮性肝癌ニ 22 例) 左葉 21 例 (內
實質性肝癌ニ 13 例, 膽管上皮性肝癌ニ 8 例)
彌漫性 33 例ヲ示シ, 右葉ニ占居スルモノ多數
ヲ占ムルハ一般ニ認メラレタル所ナリ。本研
究ニ於テハ實質性肝癌ハ右葉ニ 5 例, 左葉ニ
2 例, 何レトモ決定シ難キモノ 3 例ニシテ膽
管上皮性肝癌ニ於テハ上記 3 部位各々 2 例宛
ヲ得タリ。最近ノ貴家ノ統計ニ於テハ膽管上

皮性肝癌ニ於テ左葉ニ占據セルモノ右葉ニ比シテ遙ニ多キ結果トナリ注目ニ値ストナセルガ、本研究ニ於テハ兩説ノ中間ニ在リテ膽管上皮性肝癌ガ左右何レニヨリ多數ニ占據スルモノナリト強調スル能ハザルモ本邦ニ於テハ Eggel ノ西歐統計ニ示ス如ク一般ニ原發性肝癌ガ左葉ニ占據スルノ極メテ稀ナルモノニ非ズ、膽管上皮性肝癌ニ於テハ寧ロ實質性肝癌ニ比シテ左葉ニ占據スルモノノ比率ニ於テ優勢ナルハ興味アル事ナリ。

第2節 組織學的觀察

原發性肝臟癌ノ發生學上ノ議論ハ今日ニ於テハ殆ド一定セラレ議論ノ餘地ナキノ觀アルモ既往ニ於テ諸説紛々タルモノアリテ Riesenfeld ハ大膽管及ビ膽囊ヲ發生母地トナシ、Raunyn 一派ハ肝小葉間細膽管ヲ起源地トナセリ。サレド Raunyn 一派中ノ Waldyer ハ理論上肝實質細胞ヨリモ本症ノ發生シ得ベキヲ認容シ居タルモ Eberth ニ至リテ初メテ肝實質細胞ヲ以テ其ノ發生母地トナシ多數學者之ニ贊セリ。サレド原發性肝癌ヲ分類スルニ當リ組織學的ニ如何ナル根據ニ依ルベキヤハ未ダ渾沌タルモノアリシガ、1901年ニ山極ガ肝實質ヨリスル癌腫ニ於テハ不可缺標識トシテ「間質ガ毛細血管ニヨリテ成立スル」事ヲ主張シ次イデ Wegelin モ全ク同様ノ見解ヲ發表スルニ至リ兩種癌ノ組織的診斷上ニ一大劃期ヲ見タリ。次イデ貴家ハ組織學的發生學の見地ヨリシテ原發性肝癌ヲ實質性肝臟癌(Parenchymatöses Lebercarcinom)ト膽管上皮細胞癌(Carcinoma aus den Gallengangsepithelien)ニ分類シ、次イデ Goldzieher

ニヨリテ Carcinoma hepatocellulare (肝細胞性癌) Carcinoma cholangiocellulare (膽管細胞性癌)ト命名分類シ、後ニ山極ハ前者ヲ Hepatom (實質性肝癌) 後者ヲ Cholangiom (膽管上皮性癌)トスベキヲ提唱セリ。斯カル山極、Wegelin、貴家ノ貴重ナル劃期的研究ノ物セラレザル以前ニ於テハ肝實質ヨリナルカ、或ハ膽管上皮ヨリナルカノ判定ニ當リテハ其ノ移行像ヲ認ムルニ在リトナセシガ如ク斯カル當時バ勿論、ソレ以後ニ於テモ肝癌ト肝實質或ハ膽管上皮トノ移行像ノ有無ニ關スル檢索ニ甚ダ努力セリ。之ガ移行ヲ認メタルモノハ Schmidt, Goldzieher & v. Vokay, Mirolubow, Siegenbeck von Heukelom, Polak-Daniels, 桂田、長與、貴家、内村、藤井、俣野、太田、八木ノ諸氏ニ過ギズ。而シテ Herxheimer ハ總括的ニ常ニハ之ヲ認メ得ルモノニアラズトナシ、又 Ribbert 一派ハ癌ハ常ニ癌細胞ヨリナルモノニシテ其ノ周圍ハ受働的ニシテ移行スルモノニ非ズトノ所論ニヨリ強ク之ヲ否定セシ所ナリ。余モ亦1例ニ於テ(第10例八木發表セシモノ)之ガ移行像ヲ認メ得タルモノニシテ勿論 Ribbert ノ如ク否定スルモノニハ非ザルモ常在スルモノト解サレズ、吾人ノ解屍ニヨリテ認ムル癌腫ニ於テハ腫瘍ノ發育顯著ナル末期ノモノ多クシテ、斯カル状態ニ於ケル腫瘍中ニ於テ移行像ヲ求メントスルハ至難事ニシテ、之ヲ認メザリシ場合ト雖モ發生初期ニ遡リテ移行像ヲ否定シ得ザルハ論ズル迄モナシ。

而シテ腫瘍發育顯著ナル癌腫ニ於テ實質性ヨリスルモノナルヤ膽管上皮性ヨリスルモノナルヤノ鑑別ハ前節ニ於テ述ベタル統計學的

定論ヲ考慮シ肉眼的所見ニ依ル所多シト雖モ何レモ決定的ノモノニ非ズ、肉眼的所見ニ於テハ前述セル如ク特定ノモノヲ除キテハ決定ニ苦シムモノ甚多シ。依テ之ガ鑑別ハ組織學的所見ニ待タザル可ラザルナリ。而シテ定型的ノモノニ在リテハ組織學的ニハ兩者間ニ明カナル差別アリテ實質性肝癌ニ在リテハ其ノ構成ハ肝健組織ニ類似セル索條狀ヲナシ、或ハ胞巢狀ヲナシ、前者ニ於テハ屢細胞相集リテ腺管腔即チ花冠狀像ヲ呈シ内ニ膽汁栓子ヲ入ルル事アリ。斯カル花冠狀像ハ主トシテ索條狀配列ヲナセルモノニ多シ。最も重要ナルハ斯カル索條或ハ胞巢ガ毛細血管ニヨリテ纏絡ヲナス事ナリ。之ニ反シテ膽管上皮性ノモノニ於テハ實質胞巢ト間質結締織ノ關係ハ普通癌腫ト異ル所ナクシテ管狀腺腫、乳嘴性、腺腫性癌ヲ呈ス。實質性肝癌ニ於テハ腫瘍細胞ハ圓形、骰子形ニシテ細胞體ハ稍々淡明ニテ膽色素顆粒或ハ「グリコーゲン」様ノ顆粒ヲ入レ、又好ンデ脂肪變性ニ陥ルノ傾向アリ。膽管上皮性癌ニ於テハ癌組織ハ主トシテ圓柱狀、低圓柱狀ニシテ胞體ハ前者ニ比シテヨリ淡明ニシテ顆粒物ヲ入レズ。又好ンデ粘液樣變性ノ單純壞死、凝固壞死ニ陥ルノ傾向強シ。而シテ實質性癌ニ於テハ其ノ構造上ヨリ明カナル如ク甚シク血液ニ富ミ一般ニ充血性ナル事多キニ反シ膽管上皮性ノモノニ於テハ貧血性ナリ。

腫瘍部ノ發育狀態ニ於テモ實質性ノモノハ主トシテ排壓性ニ、膽管上皮性ノモノハ主トシテ浸潤性ナル事モ又鑑別ノ一助トナリ得ベク、更ニ周圍ノ肝實質ニ於テハ實質性肝癌ノモノハ細葉間性肝硬變ヲ伴フ事多キハ前述ノ

如キモ實質細胞コトニ細葉周邊部ニ限局性ノ肥大増生ヲ示スヲ常トスルニ反シ膽管上皮性肝癌ニ於テハ斯カル肥大増生ハ殆ド之ヲ見ズ。

以上ハ略ボ定型的ニ現レタル兩種癌ノ鑑別ナルモ、此處ニ注目スベキハ斯カル定型的組織像ハ腫瘍細胞ノ化生及ビ變性、血管ノ充血、周圍ヨリスル壓迫、間質結締織ノ増殖、殊ニ間質毛細血管ノ結締織化等ノタメニ組織の姿態ヲ變ズルニ至ル事ナリ（扁平上皮性癌、血管肉腫樣、「スキルス」、單純癌）。

上述ノ諸要點中特ニ實質性肝癌ニ於ケル毛細血管間質ト實質トノ關係、花冠狀構造ノ形成腫瘍細胞内膽汁色素顆粒ノ存在等ハ殊ニ重要ナル組織像ナリ。而シテ第1條件ハ1901年ニ山極、次イデ Wegelin ノ主張ノ根源ヲナスモノニシテ氏等ハ實質性肝癌ノ間質ハ毛細血管ニシテ膽管上皮性肝癌ハ一般癌腫ト同ジク結締織ナル事ニ注意シ此一事實ヲモツテシテモ兩種癌組織ヲ鑑別シ得ベシトナセリ。爾來諸研究者ノ何レモ之ニ賛意ヲ呈スル所ニシテ尙ホ山極ハ第2條件トシテ花冠狀像ノ存存ヲ指摘シ、此二大特長ヲ主張セラレタリ。サレド後者ハ實質性肝癌ニ特有ナル組織像ナルモ常在スルモノニ非ズシテ前述セル如ク索條狀配列ヲナスモノニ多ク實質性胞巢狀ヲナセルモノニ少キハ注意スベキ事項ナリ。尙ホ胞體中ニ膽汁色素顆粒ヲ有スル事ハ本腫瘍細胞ガ肝實質細胞ヲ母細胞トナスタメ膽汁分泌機能ヲ現スモノナルモ、之ガ陽性ナル時ハ確實ナル表徵トナリ得ベキモ然ラザル時ト雖モ必ズシモ反證トハナリ難キモノナリ。

此處ニ最も組織學的ニ興味アルハ第16例

ニシテ前述セル如ク一部幼若結節ニ於テハ甚シク未分化ノ細胞ヨリナリテ實質性ナルヤ膽管上皮性ナルヤ判定ニ苦シムモノニシテ、其ノ組織構成ニ於テ膽管上皮性ノ如ク、腫瘍細胞自己ノ形態ハ稍々實質性肝癌ニ近ク恰モ潤管上皮ノ腫瘍狀増殖ヲ思ハシムルモノアリ。然ルニ陳舊ナルモノノ一部ニ於テハ組織所見ノ部ニ於テ述ベタルガ如ク明カニ實質性肝癌ナル事ノ判定ヲ得タルモノニシテ、潤管上皮癌ト實質性肝癌ノ間ニ種々ナル中間型ヲモ認メ得タリ。本例ハ斯ノ如キ未分化ノ細胞ニヨリテ組成サレ一部ノモノハ化生ニヨリテ遂ニ實質性肝癌ノ出現ヲ見タルモノナリト解スルヲ妥當トス。此處ニ於テ最モ注意スベキハ潤管ノ存在ニシテ貴家ハ該部ハ生理的ニハ全ク認識スルヲ得ズシテ唯病的ノ場合ニノミ現ルルモノニシテ隨ツテ其ノ本態ハ果シテ小膽管ナルヤ又ハ肝細胞ニ屬スベキモノナルカ全ク不明ニシテ斯カル病的組織ニ癌腫發生母地ヲ求ムルハ穩當ナラズトシテ之ヲ否定セリ。サレド潤管ハ貴家ノ唱道スルガ如ク生理的ニ認メ難キハ事實ナルモ、併シ生理的存在スルモノナルハ云フ迄モナシ。貴家ノ考フル如ク病的ニ始メテ新生サルルモノニ非ズシテ、唯病的ニ認メ易クナルノミ。又潤管ハ肝組織中最モ未分化ノ組織ニシテ該部ヨリ輸送管竝ニ腺房上皮孰レニモ分化シ得ル事ハ胎生學上明カナル事實ニシテ、此部ニ發生母地ヲ求メントスルニ何等ノ矛盾ヲ感ゼザルモノナリ。最近俣野、岡田ノ經驗セル偽膽管上皮癌モ潤管上皮ト關係ナキヤ一應吟味スルノ要アリト信ズ。翻ツテ本例ニ於テハ肝細胞索ヨリナル偽膽管ノ形成後ニ出現シタルモノトハ解シ難ク之ガ

名稱ニ當倏ラザルモノナリ。而シテ同一肝臟ヨリ兩種癌ノ併發シ得ベキ可能性ハ何人モ思考シ得ル所ナルモ、コノ併發可能性ニ關シテハ尙ホ見解ノ一致ヲ見ザルモノアリシガ、既ニ事實ニ於テ Frassen ハ兩種腺腫ノ共存ヲ報ジ、Davidsohn ハ膽管上皮性腺腫ヲ圍ミテ二次的ニ肝細胞癌ノ發生セル例ヲ上ゲ、牟田ハ實質性肝癌ニ附隨的ニ輕度ナル初期膽管上皮癌ノ發生ヲ見タルヲ報ゼリ。又 Landsteiner ハ實質性肝癌ト膽管上皮性肝癌ノ兩型及ビ更ニ前者癌腫細胞ガ圓柱狀ニ移行スルノ像ヲ認メタリト。最近吉田ハ實驗的ニ大黒鼠ニ就キ O-Amidoazotoluol ノ飼養試驗ニヨリテ始メテ實驗的ニ實質性肝癌ヲ發生セシムルニ成功シタルガ、112 例中 14 例ニ於テハ同時ニ膽管上皮癌ノ併發ヲ見、1 例ニ於テ兩癌腫細胞ノ混在セルヲ見タリト云フ。本例ハ之等併發例ト聊カ其ノ趣ヲ異ニシ、一部ハ潤管ヨリ發生シタル膽管上皮性癌ニ準ズベキ癌腫ト、一部ニ於テ明カニ實質性肝癌ノ鏡像ヲ呈セルモノニシテ、一腫瘍ガ部分的ニ組織學的所見ヲ異ニセルモノナリ。

第4章 結 論

1) 當教室最近ニ於テ經驗セラレタル解屍體 545 例中、原發性肝臟癌 16 例ニシテ 29.17%ニ當リ從來ノ統計中最高率ヲ示スモノナリ。

2) 原發性肝臟癌 16 例中實質性肝癌 10 例 (62.5%)、膽管上皮性肝癌 6 例 (37.5%)ニシテ膽管上皮性肝癌ノ百分率高キ事モ亦從來ノ統計ニ見ザル所ナリ。

3) 原發性肝臟癌中 87%ニ於テ肝硬變ヲ

見タルモノニシテ實質性肝癌中 80%, 膽管上皮性肝癌ノ全部ニ於テ之ヲ見タリ。

4) 原發性肝臓癌中 62.5% ニ於テ「肝臓デストマ症」ノ寄生ヲ認メ實質性肝癌中 50%, 膽管上皮性肝癌中 83.3% ニ於テ認メタルモノニシテ當教室剖検例ニ在リテハ諸發生要約中「肝デストマ症」が主役ヲ演ズルモノナリ。

5) 轉移ハ一般ニ僅少ニシテ其ノ部位ハ肝門淋巴腺, 肺, 腸間膜淋巴腺, 脾被膜, 後腹膜淋巴腺, 肺門淋巴腺, 縱隔竇淋巴腺, 胸廓横隔膜, 大網, 脾臓頭部淋巴腺, 副腎ノ順位ニシテ膽管上皮性肝癌ニ比シ實質性肝癌ニ轉移ノ高度ナルモノ多キハ從來ノ報告ト趣ヲ異ニセル所ナリ。

6) 腹水ハ 81% ニ於テ認メ, 實質性肝癌中 80% 膽管上皮性肝癌中 83% ニ當ル。

7) 脾腫ハ 43.75% ニ於テ認メ, 實質性肝癌中 40%, 膽管上皮性肝癌中 50% ニ於テ出現セリ。

8) 黄疸ハ 62.8% ニ於テ見ラレ, 實質性肝癌中 60%, 膽管上皮性肝癌中 66.7% ヲ示ス。

9) 腫瘍ノ占據部ハ右葉ニ 44%, 左葉ニ 25%, 左右何レトモ決定シ難キモノ 31% ニシテ之ヲ兩種癌ニ分別スレバ實質性肝癌ニ於テハ右葉 50%, 左葉 20%, 決定シ難キモノ 30%, 膽管上皮性肝癌ニ於テハ 3 部位ハ何レモ同數ヲ示ス。

10) 第 10 例ニ於テハ下空靜脈閉鎖ニ伴フ實質性肝癌ニシテ且本例ニ於テハ腫瘍組織ト健康肝細胞索トノ間ニ移行像ヲ證明シ得タリ。

11) 第 16 例ハ兩種肝臓癌ノ混合型ノ一種ニシテ腫瘍發生母地ガ潤管ニ在リシタメ一部

ハ實質性肝癌ノ組織像ヲ現シ, 又一部ハ膽管上皮性肝癌ノ鏡像ヲ呈セルモノナリト解サルルモノナリ。

文 獻

- 1) *Clawson, J. and Cabot, S., J. of the Amer. Med. Assoc., Vol. 80, P. 909, 1923.*
- 2) *Counciller, S. and McIndoe, Arch. of internal Med., Vol. 37, P. 363, 1926.*
- 3) *Dravidson, Virchs Arch., Bd. 209, S. 273, 1912.*
- 4) *Eggel, Ziegler's Beitr., Bd. 30, S. 506, 1909.*
- 5) 藤浪 (鑑), 東京醫學會雜誌, 第 19 卷, 第 20 號, 1 頁, 明治 38 年。
- 6) 藤井, 癌, 第 6 年, 第 1 冊, 99 頁, 大正元年。
- 7) *Fraser, Virchow's Arch., Bd. 165, S. 540, 1901.*
- 8) *Fried, J. Amer. Med. Assoc., 168-241-267, 1924.*
- 9) *Goldzieher, M. n. Bokey, Z., Virchow's Arch., Bd. 203, S. 75, 1911.*
- 10) 服部, 北越醫學會會報, 第 199 號, 443 頁, 大正 3 年。
- 11) *Herxheimer, C., in Henke-Lubarsch's Handbuch der spez. pathol. Anat. n. Histol., Berlin. 1930.*
- 12) 泉, *Arch. f. kl. Chir., Bd. 100, H. 4, S. 1181, 1319.*
- 13) 桂田, 東京醫學會雜誌, 第 11 卷, 第 10 號, 449 頁, 明治 30 年。
- 14) 貴家, 癌, 第 2 年, 第 3 冊, 906 頁, 明治 41 年。
- 15) 貴家, 癌, 第 3 年, 第 1, 第 2 冊, 1 頁, 明治 42 年。
- 16) 貴家, 癌, 第 23 卷, 34 頁, 昭和 4 年。
- 17) 草間, 癌, 第 1 年, 第 2 冊, 670 頁, 明治 40 年。
- 18) 河村, 岡醫雜, 第 40 年, 第 11 號, 2319 頁, 昭和 3 年。
- 19) 三浦, 東京醫學會雜誌, 第 2 卷, 第 6 號, 287 頁, 明治 20 年。
- 20) 牟田, 岡醫雜, 第 289 號, 74 頁, 大正 3 年。
- 21) 俣野, 日本病理學會會誌, 第 13 年, 718 頁, 大正 12 年。
- 22) *Mielecki, W., Zeitschr. f. Krebsforschung, Bd. 13, S. 505, 1913.*
- 23) *Mirolubow, I., Virchow's Arch., Bd. 209, S. 367, 1912.*
- 24) 長興, 東京醫學會雜誌, 第 19 卷, 第 21 號, 1 頁, 明治 38 年。
- 25) 長興, 東京醫學會雜誌, 第 20 卷, 第 6, 7 號, 213 頁, 229 頁, 明治 39 年。
- 26) 長興, 癌, 第 1 年, 第 1 冊, 199 頁, 明治 40 年。
- 27) 長興, 日本病理學會會誌, 第 4 年, 31 頁, 大正 3 年。
- 28) 尾河, 東京醫事新誌, 2286, 7, 8 號,

大正11年. 29) 新島, 京都醫學會雜誌, 第22卷, 第10號, 93頁, 大正14年. 30) 中村(通), 海軍軍醫團雜誌, 第21卷, 121頁, 昭和7年. 31) 岡崎, 成醫會月報, 第395號, 10頁, 大正4年. 32) 岡田, 十全會雜誌, 第32卷, 第5號, 33頁, 昭和2年. 33) 大田, 東京醫事新誌, 第2676號, 1185頁, 昭和5年. 34) *Polak-Daniels, L.*, *Zeitschr. f. Krebsforschung*, Bd. 3, S. 540, 1905. 35) *Ribbert, H.*, *Geschwülstlehre*, S. 356, 1914. 36) *Siegenbeck von Henkelom*, *Ziegler's Beitr.*, Bd. 16, S. 341, 1894. 37) *Schmidt, M. B.*, *Virchows Arch.*, Bd. 148, S. 43, 1897. 38) 武内, 岡醫雜, 第263號, 1頁, 明治44年. 39) 田中, 北越醫學會雜誌, 第40年, 第6號, 910頁, 大正14年. 40) 内村, 癌, 第17年, 第1冊, 103頁, 大正12年. 41) 鵜飼, 北越醫學會會報, 第139號, 14頁, 明治37年. 42) 渡邊, 日本癌理學會會誌, 第2卷, 375頁, 明治45年. 43) *Wegelin, K.*, *Virchows Arch.*, Bd. 179, S. 95, 1905. 44) *Winternitz, K.*, *Virchows Arch.*, Bd. 209, S. 239, 1912. 45) 山極, *Mitteilungen aus d. med. Fakultät d. Kaiserlich-japanischen Universität zu Tokyo*, Bd. 5, S. 57, 1901. 46) 山極, *Virchows Arch.*, Bd. 212, S. 190, 1913. 47) 山極, 癌, 第5年, 第2冊, 225頁, 明治44年. 48) 山極, 日新醫學, 第4年, 第10號, 1441頁, 大正4年. 49) 山極, 日本癌理學會會誌, 第8卷, 544頁, 大正8年. 50) 八木, 岡醫雜, 第44年, 第1號, 79頁, 昭和7年. 51) 吉田, 東京醫事新誌, 第2806號, 2843頁, 昭和7年. 52) 吉田, 日本癌理學會會誌, 第33卷, 636頁, 昭和8年. 53) 吉田, 東京醫事新誌, 第47卷, 第12號, 2462頁, 昭和8年. 54) 吉田, 日本癌理學會會誌, 年24卷, 523頁, 昭和9年.

附圖説明

- Fig. 1.** 第10例實質性肝癌ニシテ癌細胞ハ索條狀ヲナシ, 花冠狀像ヲ認ム(第1型).
- Fig. 2.** 第4例實質性肝癌ニシテ巨大細胞ヲ有シ實質性胞巢狀ヲ構成サルル型ノモノ(第2型).
- Fig. 3.** 第11例實質性肝癌ニシテ毛細血管充盈擴張セルタメ宛然血管肉腫ヲ思ハシムルモノ.
- Fig. 4.** 第9例ノ實質性肝癌ニシテ花冠狀像著明ニシテ胆汁栓子明カナルモノ.
- Fig. 5.** 第16例實質性肝癌ニシテ, 比較的幼若ナル結節部ニシテ潤管ニ似タル像ヲ呈セル部.
- Fig. 6.** 陳舊ナル部位ニシテ實質性肝癌ノ像ヲ呈セル部.
- Fig. 7.** 第15例膽管上皮性肝癌.
- Fig. 8.** 第8例膽管上皮性肝癌ニシテ周邊部ニ於テ, 其ノ發育迅速ニシテ結締組織ノ伴ハズ肉腫様ニ進行セル部位.

中 村 論 文 附 圖

Fig. 1.

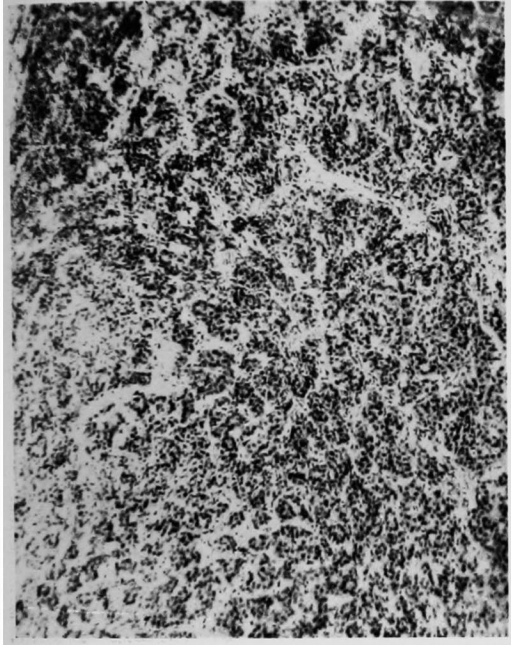


Fig. 2.

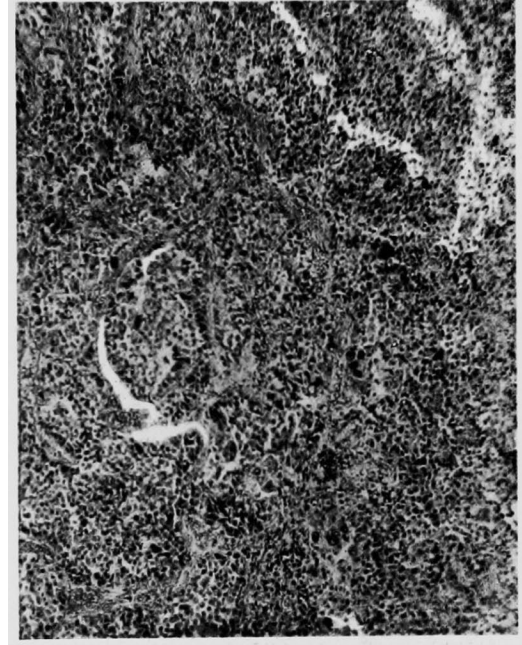


Fig. 3.

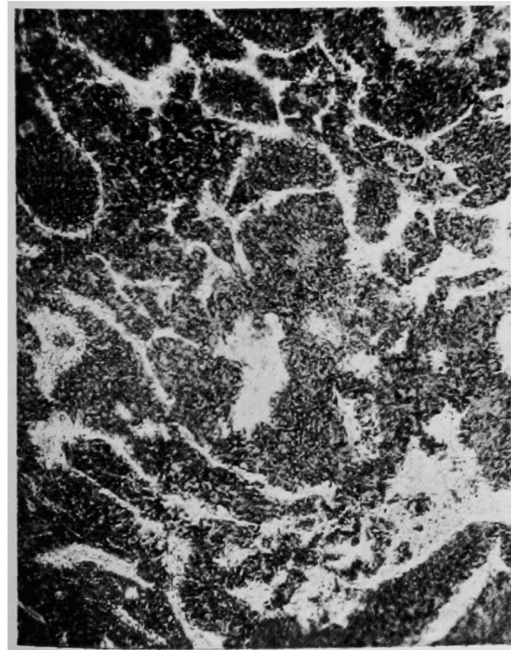
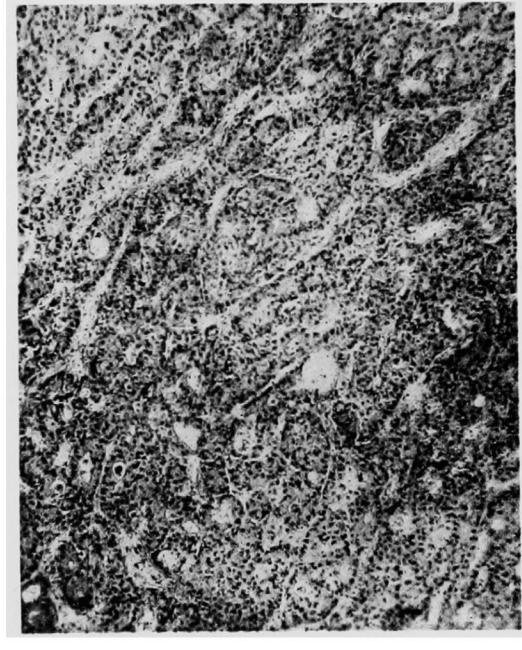


Fig. 4.



中 村 論 文 附 圖

Fig. 5.

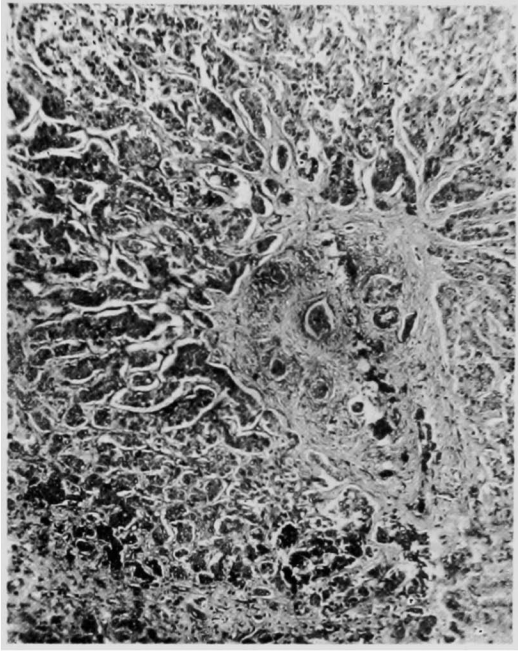


Fig. 6.

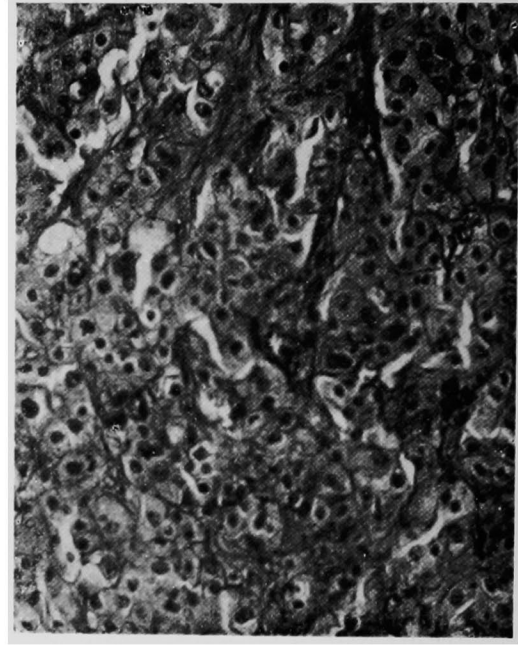


Fig. 7.

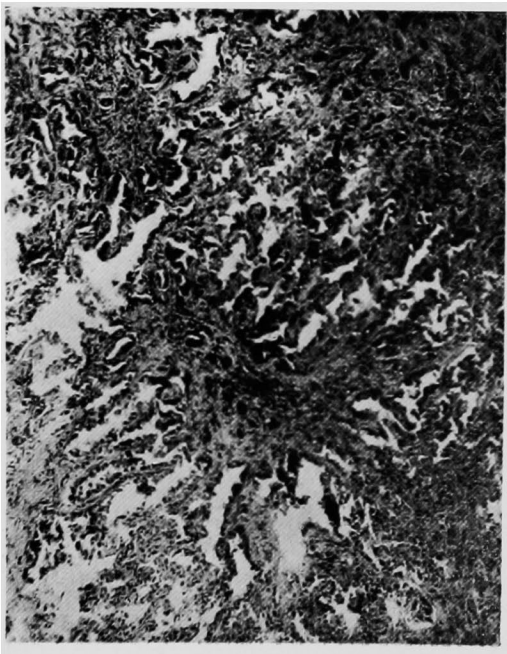


Fig. 8.

